

「ヘイトスピーチってなに？ レイシズムってどんなこと？」
のりこえねっと編(ヘイトスピーチとレイシズムを乗り越える国際ネットワーク)

はじめに、本の帯になっている部分に、のりこえねっと共同代表の辛淑玉の言葉で「偉そうな思想や信条なんか要らない。反論できない立場の相手を、ウソついて陥れるような手合に黙ってられない。」という言葉が書かれています。この言葉が目にとまり、読み始めました。

「ヘイトスピーチ」とは、皆様ご存知だと思いますが、2009年12月に、京都朝鮮第1初級学校(現・京都朝鮮初級学校)の学校前で「在日特権を許さない市民の会」(在特会)の会員らが、拡声機を使って怒声を浴びせる街宣活動が続けたことに対して、学校を運営する京都朝鮮学園が提訴し、今年の7月に大阪高裁は「在日朝鮮人を嫌悪・蔑視する発言は下品かつ低俗で、強い違法性が認められる」として、在特会と会員ら8人に計約1,220万円の支払いなどを命じたことは、まだ記憶に新しいと思います。

このような「ヘイトスピーチ」が街宣やネット上で行われていますが、これは弱い者をいじめているしかありません。

「レイシズム」は人種差別が中心になりますが、「人種差別撤廃条約」の定義に準拠した、あらゆる出生による属性を対象とした差別で、人権侵害事件です。このような行為をなくしていくには、おかしさを社会に訴えることで、おかしいと感じている人が共につながる場とレイシズム・差別について学ぶことが必要です。こういうことを進めて行くために、のりこえねっとが発足し、この本の発刊につながりました。

本の前半には、ヘイトスピーチやレイシズムに対して、おかしさを感じている、様々な立場の方々からの意見が寄せられていますが、対談された内容も掲載されていて、後半には、ヘイトスピーチやレイシズムの現状や、今後、このような事をなくしていくためにどうしていけばいいのか?なども書かれています。このような発言がある時によく言われる事に「表現の自由」だから何を言ってもかまわないというような間違った意識が出されることがあります。このことは、様々な人権侵害にも重なりますし、相手を傷つけてしまう表現の自由はあり得ないです。

世界で見ても、たくさんの国で、このようなことが法律で犯罪として扱われています。

しかし、ネット上をはじめ、あらゆるネットワークを通して、このような間

違った価値観を持った人がつながりつつあるのも現実です。

最後の方では、じゃあ今後なくしていくためにはどうしたらいいのか？という部分で書かれている内容に、精神科医の香山リカさんが言われていますが、心理学の立場から『ヘイトスピーチに必要な「ケアの視点」』という部分があり、「最近の診察の場うつ病、強迫性障害、薬物依存などの“衣”をかぶって現れる人たちも、よく聞くと子ども時代にいろいろな心の傷を体験していて、そのことがおとなになってから別の病を引き起こしている、というケースが驚くほど多いのです。そういう場合、いま表面に出ている病の治療だけでは本質的な解決にはならず、いつかそのトラウマと直面し、良い形で乗り越えていかなければなりません。」「私は、ヘイトスピーチを行う人たちの中にも、子ども時代、養育者から十分な愛情を注がれなかった、などさまざまなレベルでトラウマを抱え、そこから目を背けるために自分の外に敵を見つけ、それを激しくのしっているというケースが多数、含まれていると考えます。だとしたら、彼らに必要なのは法律での取り締まりなどと同時に、そのトラウマに対する何らかのケアなのではないでしょうか。」という部分があり、すごく印象的でした。